OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安文化をインドにどう伝えるか ： 『源氏物語』〈桐壺〉のウルドゥー語訳を検討する
Author(s)	モインウッディン, モハンマド
Citation	海外平安文学研究ジャーナル. 2020, 7.0, p. 11-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安文化をインドにどう伝えるか
―『源氏物語』〈桐壺〉のウルドゥー語訳を検討する―

モハンマド・モインウッディン

はじめに

本論では、文学を通した日本文化のインドへの伝わり方を、日本を代表する古典文学『源氏物語』のウルドゥー語訳を使って分析する。それを、日印文化交流についての研究の的を絞る第一歩としたい。

『源氏物語』のウルドゥー語訳[(1)]を読んでみたところ、昔の日本を舞台として始めからウルドゥー語で書かれた小説のように違和感がなかった。一方、日本の伝統文化と深く関わる表現などもインド風に書かれており、日本の文化がインドの読者に伝わっていないのではという気がした。翻訳を読む目的がただ物語を味わうことであるとしても、気づかないうちにその土地の文化や歴史、社会状況などが読者の頭に浮かんでくるのは当然であろう。そこで、読者が全く理解できない伝統文化に深く関わる表現などに直面した場合、そこをとばして読み続けるか、その表現を深く理解しようと表現の背景にある文化などについて知りたくなるかである。が、翻訳本に何も述べられていないと、その翻訳を読む者にはかえって興味をなくす原因となると考えられる。このウルドゥー語訳はウェイリーによる英訳の重

(1) サイヤド・エヘテシャーム・フサインが、アーサー・ウェイリーの英訳をもとに『源氏物語』(「桐壺」から「葵」まで)をウルドゥー語に翻訳した。これは、1971 年にインド国立文学アカデミー(Sahitya Akademi)から出版された。

訳であり、原文と違うところも少なくはないと想像される。西洋の学者が自分が持つ文化的な背景のもとで日本の文化を理解し、それを自分の文化の読者がわかるように翻訳したものを、ウルドゥー語で翻訳した学者は自分が持つ文化背景で西洋風になっている日本の文化を理解し、それをウルドゥー語の読者がわかるように訳したのである。すなわち、気づかないうちに日本語の原文と最終のウルドゥー語訳との間のずれが広くなっているのではないだろうか。本稿では、日本語の現代語訳、英訳そしてウルドゥー語訳を比較して、それらのギャップを探求したい。

まず、それぞれの翻訳者（ウェイリーとフサイン）について紹介しておきたい。

英訳者アーサー・ウェイリー（Arthur David Waley、1889-1966）

アーサー・デイヴィッド・ウェイリーは、1889 年 8 月 19 日イギリスのケント州タンブリッジウェルズで生まれ、イギリスで教育を受けた。彼は 1907 年に大学に入り古典学を専攻していたが、健康上の理由で大学を卒業後進学できなかった。1913 年に大英博物館に東洋関係の資料を整理するための助手として勤務し、詩人で知識人であった上司[(2)]の援助を得て、日本語と中国語の古典を習った。その後両国の古典文学を英訳した。

[(2)] 詩人 Robert Laurence Binyon (1869 – 1943)のことである。氏は「大英博物館の浮世絵や日本の絵画などの収集に尽力し、日本美術を含む東洋美術の評価向上に貢献したことはよく知られている。」（小山騰『アーサー・モリソンと日本』（『英学史研究』〈第 27 号〉日本英学史学会 1994））

ウルドゥー語訳者サイヤド・エヘテシャーム・フサイン（Sayed Ehtesham Hussain 、1912-1972）

フサインは北インドのウッタル・プラデーシュ州で育ち、教育を受けた。現代ウルドゥー語文学の大変有名な小説家、詩人、批評家であるが、そのうち批評家として最も有名である。彼は研究者として欧米に滞在し、インド文学者の集団の一員としてソ連へも行ったことがある。

先行研究

村上明香氏は、『源氏物語』のウルドゥー語訳を試み、その過程でフサインのウルドゥー語訳にも言及されている。[3]村上氏の翻訳にもフサイン訳の影響が見られる一方違うところもある。以下引用しているように、氏はウルドゥー語の宗教上の関連に気を取られすぎであるような気がする。

- ウルドゥー語はパキスタンの国語（National Language）であり、インドでは憲法によって 22 の指定言語（Scheduled Language）のひとつに定められている。宗教や地域の垣根を越えて、インド亜大陸の広域な地域に居住するあらゆる宗教集団の成員によって

[3] 村上明香「『十帖源氏』「桐壺」巻のウルドゥー語訳によせて」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』第 3 号 2015 年 9 月）、「ウルドゥー語版『源氏物語』の色の世界」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』第 4 号 2016 年 3 月）、「ウルドゥー語訳の問題点」「ウルドゥー語版『源氏物語』（桐壺）における翻訳の問題点」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』インド編 2016　2017 年 3 月）

話されているが、過去 300 年、その主たる文学言語として使用してきたイスラーム教徒と密接な関係を維持している。／ウルドゥー語の持つこの言語的特徴は、今回の翻訳で特に注意した部分の一つである。というのも、イスラーム教徒と密接な関係にあるため、宗教的な表現がどうしてもイスラームと結びついてしまうからである。そのひとつに、故人の名前につける「故」や「亡き」にあたる語をどう訳すか、という問題があった。1971 年にインド国立文学アカデミー（Sahitya Akademi）から刊行されたウルドゥー語訳『源氏物語』1 の中で、訳者サイヤド・エヘテシャーム・フサイン Sayed Ehtesham Hussain （1912-1972） は、アラビア語起源の「マルフーム（男性形）/ マルフーマ（女性形） marhūm/marhūma アッラーの慈悲を受けたの意」という語を使用した。しかし、この語は一般的にイスラーム教徒に付与されることに加え、死者復活の教義をもつイスラームでは火葬はタブーとされている。この問題をめぐって 1975 年、ある論争が起きた。ウルドゥー現代詩壇の異端児と呼ばれる詩人ヌーン・ミーム・ラーシド Noon Meem Rashid（1910-1975）がロンドンで客死した際、彼の遺言によって遺体は荼毘に付された。当時、パキスタンの新聞では「マルフーム」をつけて彼の死が報じられたが、土葬ではなく火葬を望んだ彼はイスラーム教徒ではないため、非イスラーム教徒に用いられるペルシャ語起源の「アーン・ジャハーニー（ān jahānī）来世へ向かった、の意」を使用するべきだ、との議論が起きたのである。（「『十帖源氏』「桐壺」巻のウルドゥー語訳によせて」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』第 3 号）

- まず問題となったのが、宗教的な単語・言い回しの翻訳である。というのも、ウルドゥー語は過去 300 年、その主たる文学言語

として使用してきたイスラーム教徒と密接な関係を維持している。そのため、宗教的な表現がどうしてもイスラームと結びついてしまうからである。その例として、故人の名前につける「故」や「亡き」にあたる語をどう訳すか、という問題があった。1971年にインド国立文学アカデミー（Sahitya Akademi）から刊行されたウルドゥー語訳『源氏物語』1 の中で、訳者サイヤド・エヘテシャーム・フサイン Sayed Ehtesham Hussain（1912-1972） は、アラビア語起源の「マルフーム（男性形）/ マルフーマ（女性形）marhūm/marhūma アッラーの慈悲を受けたの意」という語を使用した。しかし、この語は一般的にイスラーム教徒に付与されることに加え、死者復活の教義をもつイスラームでは火葬はタブーとされている。よって、今回の翻訳ではこの単語の使用を避け、イスラームと直接関係のない「アーン・ジャハーニー（ān jahānī）来世へ向かった、の意」」を用いることとした。（「ウルドゥー語版『源氏物語』（桐壺）における翻訳の問題点」、『海外平安文学研究ジャーナル』インド編 2016）

氏の翻訳はフサイン訳と比べてより細かいが、フサイン訳の影響は所々に強く見られる。また、氏は「宗教的な単語」にこだわり過ぎ、フサインと違う翻訳をしようとしているが、それはかえっておかしくなっている場合がある。

まず、ウルドゥー語のいわゆる宗教上の関連について言及したい。ウルドゥー語が生まれ育った国はインド（現パキスタンを含む）であり、ペルシャ文字を使用して多宗教多文化を持っている地方である。20 世紀の初め頃までは、宗教と関係なく一般の人々によって使われており、ウルドゥー語話者の数はヒンディー語話者より多かった。近

代インドの大変有名な文学者ムンシー・プレームチャンド（ヒンディー語とウルドゥー語の文学者として有名）は最適な例である。プレームチャンドの小説の登場人物が宗教と関係なく皆ウルドゥー語が勉強できる学校に通っている場面は、当時のそのような社会状況を十分表していると言える。例えば、プレームチャンドの『盗み』という作品の主人公「私」が従兄と一緒に近くの村にある学校で習っている教科の中にウルドゥー語があることは注目に値する。

2015 年に出版された 500 頁以上の著作物『Gita Press and the Making of Hindu India』[(4)]によると、19 世紀末ごろから始まった右派の運動の結果として「ヒンドゥー教徒のためにヒンディー語、ムスリムのためにウルドゥー語」のように分けられた。このような宗教による分け方は言葉の特質にどの程度影響したかははっきりとは言えないが、注意すべきところは当時までウルドゥー語が使われてきた社会である。それは多宗教の社会であり、それぞれの儀式や習慣などが表現できる言葉が存在しているはずだろう。言葉や表現の形成にその社会が緊密に関わっていることは周知のごとくであり、ウルドゥー語の場合も同じであろう。

村上氏が指摘した、「イスラーム教徒と密接な関係を維持している。そのため、宗教的な表現がどうしてもイスラームと結びついてしまうからである。」という主張には無理がある。ウルドゥー語が 20 世紀の初め頃まであまり宗教によってその話者が分けられていなかった時期に、イスラーム教以外の宗教的な儀式や慣習はどのように表現されていたかという疑問が浮かんでくる。また、『源氏物語』の「「故」

(4) Akshaya Mukul『Gita Press and the Making of Hindu India』（Harper Collins *Publishers* India, 2015 年）

や「亡き」にあたる語をどう」訳せばいいかについては、村上氏は、パキスタンで起きた前述の二重下線部の事件を参照し「アーン・ジャハーニー（ān jahānī）」という訳語を提供しているが、これは一般の人々にそれほど簡単に理解されない言葉であり、むしろイランの用法が頭に浮かんでくる。「マルフーム（男性形）/ マルフーマ（女性形）」なら一般的に「故」や「亡き」の意味として伝わる。この場合はフサインが選んだ言葉の方が「故」や「亡き」をよりよく伝えていると考えられる。

問題の所在

文学とは、人間の活動のあらゆる側面を含んでいて、その文化、社会、伝統など多様な側面を反映していると言われている。故に、文学作品の翻訳とはその文化の橋渡しになるべきではないかと考えている。その意味では、『源氏物語』のウルドゥー語訳はどの程度日本の伝統文化をインド人、特にウルドゥー語話者に伝えたかを検討してみたい。本稿では、広く読まれてきたフサインによって行われた『源氏物語』「桐壺」のウルドゥー語訳を中心に考察を行いたい。そこで、フサインが使用したウェイリーの英訳と現代語訳とフサイン訳を比較して考える。

現代語訳・ウェイリーの英訳・フサイン訳の比較に見る平安文化の伝え方

村上氏は「ウルドゥー語版『源氏物語』の色の世界」（伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』第4号2016年3月）において『源

氏物語』における色彩について詳しく分析しているから、今回はそれを飛ばすことにしたい。そして、以下の項目を中心に、重訳のフサイン訳を現代語訳と比較してみる。

ア）言葉・表現が伝える言語的文化

イ）日本の宮廷文化に関する知識

ウ）和暦と季節について

エ）慣習、その他

ア）言葉・表現が伝える言語的文化

まずは、「桐壺」という題名から見てみると、フサイン訳は「キリット＋スボ」[5]としている。これは作中ほかのところも、同じになっている。「つ」はインドなど多くの国々で「す」と混同される場合が多い。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の時インドのマスメディアでは、「つなみ」を「すなみ」と記す新聞もあった。「つ」は強調されないと「す」と間違われる可能性は高い。フサインが訳したころ、日本語はまだそれほど知られていなかった時代であり、フサインは英訳の「KIRITSUBU」を「KIRIT＋SUBO」と理解してしまったのだろう。

「藤壺」の場合もフサインは同様に「つ」を「す」としてとらえ、「フジット＋スボ」にしている。また、日本語の「た」の発音とローマ字の「Ta」の発音をウルドゥー語では区別している。「た」は「ٹ」で「Ta」は「ٹھ」のように書く。が、両ウルドゥー語訳はローマ字の「Ta」（「ٹھ」）の発音とし、区別していない。このように日本語の発音が不正確に伝えられてしまったのだ。

[5]村上訳ではこれは言うまでもなく「きりつぼ」になっている。

イ）日本の宮廷文化に関する知識

いずれの翻訳本においても「女御や更衣などといったお后が大勢いらした」の「女御」や「更衣」などといったお后は理解されず、日本の宮廷の大変重要な制度は理解できていない。ウェイリーは「gentlewomen」（上流婦人，貴婦人）のように訳しており、それを受けてフサインは訳しているため、これでは日本の宮廷制度における「お后」はどのようなものだったかは理解し難い。村上氏のウルドゥー語翻訳を見てみると「宮廷で大勢の女王が住んでいた」となっている。ウェイリーはイギリス式の「侍女」を受けて「gentlewomen」のように翻訳していると思われるが、村上氏の翻訳は〈日本の天皇が大勢の女王を持っていた〉という印象を与える。

また、「帝」や「いつの時代」の翻訳は、ウェイリー、フサイン、また村上氏いずれも全く同じように翻訳しているが、それらは、日本の「帝」と「海外」の「emperor」の間に差をつけず、日本の天皇制を海外の君主制と区別できていない。それぞれの文化的な背景を持つ言葉はもちろんあるが、脚注か何かの方法で日本の「帝」の独自性について述べたほうが良いのではないかと考えられる。

村上氏は、「桐壺」とは建物の名で、そこに住んでいた「更衣」が「桐壺」として知られるようになったというように「桐壺」の名付け方について述べている。フサイン訳では、彼女に皇子が生まれた場面の後に、「彼女の宿所は宮殿の桐壺と呼ばれる区画にあった（そして彼女もその名前で知られるようになった)」と記している。が、「(そして彼女もその名前で知られるようになった)」は、ウェイリー訳にもなく、現代訳にもない。この部分はフサインの推測によるものだと言えるが、彼が日本の宮廷のこのような名前のつけ方についてよく調べていることが伺える。この部分は、日本をあまり知らない読者に、

彼女の名前は彼女の宿所「桐壺」から来ていることを理解させる。

次に、「北の方」、「袴着の儀式」の翻訳を以下に見てみよう。

例一

「(前略)母親の〈北の方〉は、由緒のある家柄出身であり、古風な人なので、他のお后たちにも負けないようにしています。」(現代語訳)

「母親は、父親が存命中は有力者であったことを常に忘れなかった。」(フサイン訳)

「母親は、高貴な氏族に連なる優しい老女だった。」(村上訳)

のように翻訳されているが、いずれの場合も「北の方」の意味が見られない。広辞苑によれば、「北の方」とは「《寝殿造で、北の対屋(たいのや)に住んだからいう》公卿などの妻の敬称。北の台。」[6]である。これらの翻訳において、少なくとも「貴族」か「公卿」「大名」に相当する表現が使われていれば、平安のこの文化はある程度伝えることができたと言える。

次に「袴着の儀式」について、

例二

〈光源氏(若君)〉は、三歳 になった年、袴着の儀式をしました。(現代語訳)

今や幼い皇子も[7]三歳になった。衣着せの儀式が皇太子のものであるかのごとく盛大に祝われた。(フサイン訳)

下の皇子も三歳になると最初習慣的な衣を着せる儀式が盛大に祝われた。(村上訳)

村上氏は、「ウルドゥー語版『源氏物語』(桐壺)における翻訳の問

---

[6] 『広辞苑』第六版(岩波書店 、2008 年)

[7]ウルドゥー語訳では「皇子も」は、もともとは「下の皇子は」である。

題点」[8]において、「(前略)「袴着の儀式」は「初めて儀礼用の衣装を身に着けさせる祝いの儀式（pahlii baar rasmii libaas pahnaane kii tahniyatii taqriib)」、「読書始めの儀式」は「勉学始めの儀式（maktab nashiinii kii taqriib)」、「元服」は「成人の儀（baaligh hone kii taqriib)」と訳した。」のように述べている。

ブリタニカ国際大百科事典の解説を見てみると、「袴着の儀式」は以下のようになっている。

> 幼児に初めて袴をはかせる儀式。古くは男女の別なく 3～7 歳の間に行い、江戸時代以降 5 歳の男児に定着した。平安時代にはもっぱら公家の間に行われたものであるが、のちに武家、さらに庶民の間にも行われるようになった。幼児を吉の方角に向けて碁盤の上に立たせ、麻の袴を着せ、左の足から袴をはかせ、初めて双刀を差させた。（中略）近世以降旧暦 11 月 15 日に行われるようになり，七五三（11 月 15 日）の風習となった。[9]

また、「元服」については、「男子が成人し、髪形、服装を改め、初めて冠をつける儀式。元服の時期は一定しなかったが、11 歳から 17 歳の間に行われた。儀式は時代、身分などによって異なり、平安時代には髪を結い、冠をつけ、中世武家の間では冠の代りに烏帽子を用いた。加冠の人を烏帽子親、元服する人を烏帽子子と称し、幼名が改められ実名（成人後の名前）が定められた。（後略）」[10]となっている。

ところが、「袴着の儀式」や「元服」が持つ文化的歴史的意義など

---

[8] 伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』インド編 2016

[9] https://kotobank.jp/word/%E8%A2%B4%E7%9D%80-113522 （ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 ウェブアクセス 2018 年 1 月 15 日）

[10] https://kotobank.jp/word/%E5%85%83%E6%9C%8D-61021 （ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 ウェブアクセス 2018 年 1 月 15 日）

は読者に伝わっていない。この機会を利用して、翻訳者は日本の伝統にある大変重要な儀式を外国人に伝えるべきではなかったかと考えている。

ウ）和暦と季節について

「いつの時代のことでしょうか」という冒頭部をまず取り上げたい。フサインはウェイリーと同じくその時代について明確に述べておらず、「いつの時代であったか知る必要はない」というように訳しているため、当時の時代背景はおろか、どの天皇の時代かという意味であることも読者に伝わっていない。村上氏は「醍醐天皇の時代だった」のような表現を書き加えている。ところで、これは中世インドのムガール帝国の「ムガール時代」と同じく理解されてしまう可能性が高い。これは日本の「徳川時代」と同じような名付け方である。

他方月名などは西暦とあまり区別していない。例えば、「８月」を今日と同じ西暦の「August」としているが、周知のごとく、和暦が現行西暦になったのは明治5、6年以降のことであり、作品の書かれた平安時代の暦は旧暦だったことを読者に伝えるべきでなかったろうか。

そしてまた、季節に関する翻訳に注目したい。季節の言葉を言葉通りに翻訳しているが、それぞれの季節の時期はインドと日本は違うので、その点はどちらでも伝わっていない。

例三

> その年の夏、母の御息所 〔〈桐壺の更衣〉のことです。〕は、病気になって実家へ帰ろうとしますが、〈桐壺の更衣〉がいつも体が弱いことに、帝は慣れてしまい、帰ることを絶対に許しませんでした。（現代語訳）

この年（発表者注：その年）の夏、天皇の愛人は大層ふさぎ込むようになった。家へ戻らせてくれるように何度も懇願したが、彼女の願いは決して聞き入れられることがなかった。（フサイン訳）

その年の夏、彼の母は、また病気になって自分の両親の家へ帰ろうと天皇の許可を得ようとしました。いつも彼女が病気にかかっていたから、天皇は彼女の言葉にあまり注意も払わなかったし、帰ることを許しませんでした。（村上訳）

フサイン訳が現代語訳と非常に違っている部分はさておき、「夏」の捉え方に注目したい。日本の夏とは、7 月下旬から 8 月の間だとされるが、インドでは 5 月から 6 月である。日本の夏の時期にインドではもう夏は終わっており、雨季が終わりに近づいている時期である。

同様に、数ページ後に見られる「秋」についてだが、フサインは「秋」と翻訳しているが、村上氏はこれを訳しておらず、「ある晩強くて寒い風が吹いていた。」のようにしている。インドの秋は 10–11 月で雨季の後に来るが、日本では 9 月にもう始まっており、夏の後に来るものである。

このように、両国の季節がめぐって来る時期には違いがあるため、読者にその点が理解できるように工夫すべきだったと考える。いずれの翻訳からも、日本の季節に関して海外の読者に正しく伝えられていない。

エ）慣習、その他

ここでは、日本の喪中に関わる慣習、平安時代の乗り物、鳴く虫、当時の高貴な女性の身の回り品などの翻訳によって伝えられる『源

氏物語』の世界を覗いてみよう。

まず、「輦車」に注目したい。

例四

帝は、かわいらしい〈桐壺の更衣〉が、やつれて意識がはっきりしない様子を御覧になって、今までのことや将来のこと、いろいろなことを約束したりするけれども、〈桐壺の更衣〉は、返事をすることもできません。つらそうな顔をして、意識を失った状態です。帝が「死への旅にも、共に行こうと約束しましたのに、私を残してはいけませんよ」と、おっしゃるのを、〈桐壺の更衣（女）〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。（中略）帝は、〈桐壺の更衣〉に輦車に乗ることを許し、〈桐壺の更衣〉は実家に帰りました。（現代語訳）

ひどく困惑し、心配しながら輿（注：paalkii、以下も同様）を呼んだ。しかし輿の中に彼女を横たえようとすると、彼はそれを止めて言った。「いつかはだれもが必ず通る道を、独りでは通らないと、ふたりで誓ったではないか。どうして彼女を独りで行かせられようか」。愛人はこの言葉を聞くと最期の言葉を発した。（中略）こう、息も絶え絶えに消え入りそうな声でささやいた。この最期の言葉を発するために力がこみ上げたかのようだったが、ひと言ひと言が大変な苦しみと痛みで発せられたのだった。何があろうとも、天皇は最期まで彼女の傍に居たいと思っていた。しかし困ったことに、彼女のために最期の祈りを捧げる僧侶がすでに家へ派遣されていた。彼女は夜になる前に自分の家に到着しなければならなかった。そのため、天皇は仕方なくその女を行かせたのだった。（フサイン訳）

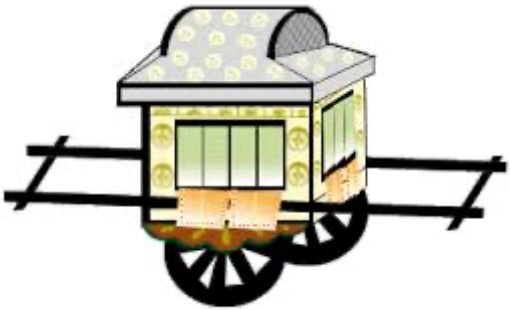
「輦車」の翻訳の部分だけを村上訳に見てみよう。

天皇は《桐壺》王妃に輿（paalkii）に乗ることを許し、彼女は自分の実家へと帰っていきました。（村上訳）

上記の如く、フサインも村上氏も「輦車」を「パルキー（注：インドの輿）」と訳しているが、「パルキー」は以下のようなものである。 (11)

(11) http://www.palki.in/images/palki13.jpg 、
http://www.palki.in/images/palki18.jpg （ウェブアクセス 2018 年 1 月 16 日）

一方、輦車[12]は、



パルキーは人力で持ち上げて人を運ぶ「輿」なので、車輪のついた輦車の訳としては不適切と言うべきではないだろうか。異なる文化の乗り物を別の言語にある単語に置き換えるのは容易ではないが、この例の「車輪があるかないか」のような基本的な違いには注意を払う必要があるだろう。平安時代の高貴な人の乗り物としてウルドゥー語文化圏に「輦車」を正しく伝えるには、いくつか言葉を加えなければならないだろう。

次に、喪中の慣習や服喪期間について。

例五

喪中の人が宮殿にいることは前例にないので、〈光源氏〉を母君の実家に帰らせました。〈光源氏(若君)〉も何が起きたのかもわかりません。〈光源氏〉は、周りの侍女たちが泣きわめき、帝も涙がとまらなくなっていらっしゃるのを、何だか変だと見てい

(12) http://fine.tok2.com/home/bookend/zatu/kuruma/index.html （ウェブアクセス 2018 年 1 月 16 日）

ます。（現代語訳）

天皇は幼少の皇子をこの上なく愛しており、離れたくないと思っていた。しかしこの出来事のあと、この子をどこか宮殿の外に置いたほうがよいと思われた。子どもは何が起きたのか理解していなかった。しかし、召使たちが皆嘆き悲しみ、自分の父である天皇がたえず泣いているのを見て、何か大変な不幸が起こったのだと察したのは確かだった。この子は、普通の別れですら人びとを悲しませるということに気付いていた。しかし、これは今までに見たこともないほどの嘆きと弔いのあり様だった。それで、これはただならない別れにちがいない、と思い至った。（フサイン訳）

皇子がなぜ宮殿を離れなければならないか、フサイン訳からは理解できない。現代語訳の「喪中の人が宮殿にいる」ことができないという当時の日本の喪中に関わる慣習は、村上訳では「このような状態においても彼は下の皇子を見たかった。しかし、喪中の人が宮殿にいることは前例にはなかった。」という言葉で伝えているが、フサイン訳からは読み取ることができない。

また、フサイン訳においては「天皇の命により服喪に定められた7週間は、たいそう盛大に挙行された。」（フサイン訳）とあるが、これは、仏教で忌中とされる四十九日のことをフサインが言っていると考えられる。

さて次には、「鈴虫」を取り上げてみよう。

例六

「鈴虫が声をせいいっぱい鳴き振るわせても　長い秋の夜を尽きることなく流れる涙でございますこと」、「ただでさえ虫の音のように泣き暮らしておりまして荒れ宿にさらに涙をもたらし

ます内裏からのお使い人よ」（現代語訳）

「冷たい風に震える草の中で鈴虫が絶え間なく大きな鳴き声をあげていた。」、「夜から朝までずっと私の涙はとめどなく流れる まるで決して止むことのない鈴虫の泣き（注：鳴き？）声のように」、「幾千もの虫の声がこだまするこの草むらに 雲の上に住む人たちの涙の露が降りる」（フサイン訳）

ここは、まず日本人の自然との近い関係を伝える一方、「鈴虫」の鳴き声が日本文化の文脈の中では独特な意味を持っていることをうかがわせる部分である。しかしフサイン訳では、その独特な意味が読者に伝わっていない。村上訳も日本のその文化を伝えていない。

次は、「装飾品」について。

例七

良い贈り物をする場合ではありませんので、〈桐壺の更衣〉が残した（注：遺した？）着物や装飾品を、手紙にそえてあげました。（現代語訳）

あるいは天皇が贈った亡き娘の鏡や櫛、その他、幾つかの品物を渡した。娘亡きあと、これらの品物は無用なものだったが、天皇にとっては過ぎ去りし日の形見の品となり得るものであった。（フサイン訳）

これは、天皇に良い贈り物をする機会ではなかったので、返事の手紙と共に亡き女王の伝統的な服装や装飾品を使いの娘に渡した。（村上訳）

現代語訳からは「装飾品」とは何か理解できないが、ウェイリーから重訳したフサインはこれを「鏡や櫛、その他」としている。「鏡や櫛」から平安の高貴な女性の身の回り品がどのようなものか理解される。

最後に、「和歌」という言葉そのものがウルドゥー語でどのように訳されているか見てみたい。

例八

〈桐壺の更衣（女)〉も、とても嬉しく思い、次のように和歌を詠みました。(後略)（現代語訳）

愛人はこの言葉を聞くと最期の言葉を発した。(後略)（フサイン訳）

これを聞いて女王も嬉しくなり、このようなシェール[13]（注：カプレット）を詠んだ。（村上訳）

ここで見られるように、フサインは「和歌」という言葉を訳していないが、村上氏は「シェール」と訳している。「和歌」が出て来る他の箇所の翻訳をフサインと村上訳に見てみよう。

例九

帝からの手紙に書いてあった和歌です。(現代語訳）

そして一編の詩。その詩の意味はこうだった。(フサイン訳）

手紙にはこのシェールが書いてありました。そのシェールの意味は、(後略)（村上訳）

現代語訳ではこの他に、以下のように「和歌」という言葉が使われている。

「〈靱負の命婦〉が、〈桐壺の更衣〉の母に会って詠んだ和歌です。【〔小見出し 26〕】」、「〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）の話や〈光源氏（若君)〉のことなどを話して、贈り物を見せると、帝は次のように和歌を詠みました。〔小見出し 37〕」、「帝は、〈桐壺の更衣〉の母（祖母君）の生活を心配して、次のように和歌を詠みました。〔小見

[13] 二行連句、対句と似ている。ウルドゥー語の韻文では普通。

出し 40〕」

フサインは、いちいち「和歌」を翻訳していず、「例八」に取り上げたフサイン訳のようにしている。それはおそらくウェイリー訳の重訳の影響だと言えるだろう。他方、村上訳では上記のように「シェール」として訳している。フサイン訳の訳し戻しは「詩」となっているが、フサイン訳のウルドゥー語では「Nazam」（ナザム）や「Gazal」（ガザル）である。両方ともウルドゥー語の詩だが、形式などには差がある。「Nazam」の場合、題目がなければならない一方、「Gazal」の場合連歌と似ているが二行の連句のいくつかの組を合わせて詠まれる。『源氏物語』の「歌」の場合、題目なしで、ほとんどは文字数に決まりがある詩である。ウルドゥー語は韻文の豊かな言語であり、行の数や題目の有無などで詩の種類が変わる場合がある。例えば、二行の連句を一つの「シェール」と言い、四行の詩を「ルバイー」という。村上氏が使用した訳語「シェール」は普通、同数の音節から出来上がる二行の連句のことである。ウルドゥー語訳に見られる「和歌」の翻訳は、日本の和歌が「Nazam」や「Gazal」を短くしたものであるか、村上訳にあるように「シェール」であるというような印象を与えている。いずれの場合も、「和歌」がどのような韻文かはウルドゥー語の読者に伝わっていないだろう。

結びの言葉

本稿は、言葉そのものの翻訳よりも、その翻訳が伝えるべき日本の文化や慣習について考えようとしたものである。そこで、平安時代の宮廷を中心とした文化を巡るウルドゥー語による表現を、『源氏物語』を題材として比較検討してみた。

その過程で考えさせられたことは、大きく分けると二つある。一つは文学の翻訳における文化翻訳の重要性、そしてもう一つはその限界である。古典文学の翻訳に限らず文学の翻訳にとって、文化の理解が不可欠であることは言うまでもない。しかし、それを十分に訳出することは大きな困難を伴い、場合によっては不可能であることを我々は経験から悟ることがある。文学を、文学本来の味わいや読む楽しみを維持したまま、異なる文化を持つ他の言語に翻訳することは、機械翻訳には決して任せられず、異文化に対する深い理解と洞察力を持った人の手によらなければならない。

現在日本では、日本文学をグローバルな視点から読むことや、それを海外へどのように発信すればよいかが課題になっている。今後文学の翻訳や分析を行う時、それらを念頭においておくべきではないかと考えている。

【付記】『源氏物語』の現代語訳、フサイン訳の訳戻しの引用は、伊藤鉄也編『海外平安文学研究ジャーナル』に拠る。旧字は適宜新字に直し、ルビは省略した。下線は全て論者による。

（大阪大学　助教）